



DanDan Vol.36

Culture Door

～文化のトビラ～

世界には、人類の営みの成果である「文化」が数多く存在しています。先人が築いた文化に触れる行為は、未知との出会いにつながるトビラを開く鍵ともいえるかもしれません。きっとその出会いは「学び」となって人生をより豊かなものにし、また新たなトビラへアクセスするきっかけとなるでしょう。今年度は「文化のトビラ」をテーマに、千代田区内で生き続けるさまざまな文化へいざないます。

あのカメラも。あのケータイも。「絶滅メディア博物館」



》》千代田区立スポーツセンターの向かいにある、ガラス張りの建物のディスプレイが気になっていたという方はいらっしゃいますか。今回特集するのは、神田で2023年にオープンした「絶滅メディア博物館」。家庭用動画カメラを軸に、タイプライター、携帯電話、パソコン、音楽プレーヤー、そして記録メディアなどを収集・展示しています。それらの展示を巡る時間は、まさに「自らの記憶のトビラを開ける旅」でもありました。

EXTINCT MEDIA MUSEUM / UCHIKANDA・TOKYO



〒101-0047 千代田区内神田2-3-6 楓ビル1階 [開館日] 月～金 11:00-19:00 / 土日不定期
[ホームページ] <https://extinct-media-museum.blog.jp/otemachi/>



「紙と石以外のメディアはすべて絶滅する」。この考えのもと、進化の過程で減んだ、もしくは減りつつあるメディアとメディア機器を収集展示する私設博物館が、ここ絶滅メディア博物館です。館内に足を踏み入れるとまず目に飛び込んでくるのが、時系列・メーカー別・そして映画に登場したアイテムと、テーマ別に並んだ約100年分の家庭用動画カメラの数々。静止画カメラは100年近く前のオールドレンズを最新の本体に装着して使うといった楽しみ方がある一方、家庭用動画カメラは規格自体の進歩が目まぐるしく、すなわち「減んで」いくペースが速いといえます。

紙と石以外のメディアはすべて絶滅する——絶滅メディア博物館



「メディアの歴史はメーカー間の戦争の歴史。ここにはその兵たちが眠っています」。解説してくださったのは、川井拓也館長。子どものころから熱心な映画ファンで、所蔵のカタログ資料に紛れて置いてある、映画フライヤーや新聞の切り抜きのコレクションにも注目です。映画ファンが高じて映像の仕事に携わり、撮影スタジオを運営する傍ら、その文化事業として隣にこの博物館を開業されました。

収蔵品の約8割が寄贈により成り立っているのが特徴のひとつです。旧規格の記録メディアを集める際に「絶滅したメディア」を寄贈してください、と呼びかけたことが話題を呼び、寄贈品の幅が広がっていったそう。カメラの博物館といえば同じ千代田区内に「日本カメラ博物館」がありますが、さらに広く、オーディオもパソコンも収蔵したいという想いから、「ガジェット博物館」「歴史を変えた機器博物館」などの候補も挙がったなか、「絶滅メディア博物館」というインパクトのある名前が生まれました。

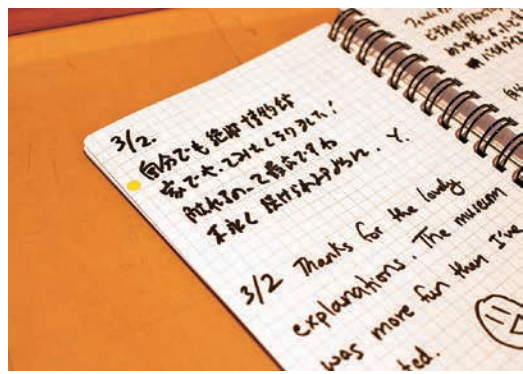


カメラ以外の機器でいうと、この夏に整備されたばかりの地下への階段ゾーンは、主に携帯電話や音楽プレーヤーといった手のひらサイズの機器をコレクションしています。やはり記憶に新しい製品が多いだけあり、メインのカメラ以上に熱心に見て盛り上がる方が多いのだとか。私設博物館として独自のルールを設けており、会話や撮影、展示品を手にとることが可能。絶滅していくはず

の収蔵品の写真や動画が来館者それぞれのメディアに記録され、ネットワーク上に分散保存されることを最終目標としています。リスクはあるものの、一点もののアートとは違い量産品を扱う利点を活かし、「手に持って使っていたモノだから、触れることでより鮮明に当時を思い出す」点から、このルールにこだわっているとのこと。



訪れた高齢の方が、持っていたモノや昔ほしかったモノを見つけて、展示品を手にとり少年のような目で盛り上がる姿が印象的だそうです。一緒に訪れた人同士に限らず、たまたま居合わせた来館者同士のコミュニケーションも見られるというから驚きます。モノを通じて昔の記憶を呼び覚ます(想起する)、他者と交流するといったことが、そのまま学びにつながるのではないかと川井館長は考えていらっしゃいます。「想起」の効果について専門家を招いて解説するようなイベントもいずれは行いたい、と展望を語っておられました。



千代田区や神田という立地の特色についても伺いました。昔の8mmフィルムの上映会なども行われる「メディアの街」神保町、電気街の面影を残す秋葉原、古くからの職人街で、カメラメーカー「ゼンザブロニカ」を生んだ神田、といったエリアに囲まれたユニークな立地であると感じられているそう。近隣のビルの方から思わぬ掘り出し物が寄贈されるという出会いもあるようです。地域とつながることで、収蔵品やイベントがますます充実していくことを期待してやみません。



- [写真]
- 1 | さまざまな切り口で並んだカメラやパソコンに圧倒される
 - 2 | 映画に登場したカメラ機器は積極的に寄贈募集中。お心当たりのある方はぜひご一報を
 - 3 | 魅惑の階段エリア。使っていたガラケー、ありますか？
 - 4 | 海外からの来館者も多い
 - 5 | 川井館長。BOLEX 16mmシネマカメラと

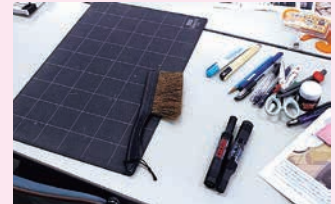
オリジナル・キャラクターをつくろう!『好き』をカタチにするマンガ教室

〈ジュニアカレッジ・全2回〉 2024.9.7〔土〕・8〔日〕@九段生涯学習館

芸術の秋が近づく9月。2日間を通して、一からマンガを描く講座を開講! マンガ好きの子どもたちが九段生涯学習館に集まり、プロマンガ家である講師、ヒロモト森一氏のもとで、想像を自由に表現する方法を学びました。

講座レポート | 「物語をつくるにはまず、キャラクターから」「好きなものをキャラにしてみよう」そう切り出して、1日目のレクチャーが始まりました。恥ずかしそうにしながらも、自分の『好き』を語る子どもたちのキラキラとした眼差し。その瞳の奥で生まれたキャラクターたちが、白い紙を埋め尽くしていきます。2日目は、前日に描いたキャラクターを軸に1ページのマンガを描きました。昨今はデジタル作画が主流となっていますが、今回はマンガ原稿用紙やスクリーントーン(網掛け模様のシール)などを使ってアナログの原稿執筆に挑戦。触れる機会が少ない画材で、熱心に作画していました。途中で行われたプロマンガ家による実演見学も、子どもたちにとっては貴重な体験のひとつです。講師や周りの子から刺激を受け、思い思いの個性豊かな作品を描くことができました。

ヒロモト森一氏とマンガ教室 | マンガ家として幅広く活躍されているヒロモト森一氏。子どもたちにも馴染み深い「ポケモン」のキャラクターデザインやアートディレクションも手掛けられたことがあります。講座中は、寄り添う姿勢で一人ひとりに声掛けし、個がもつユニークな表現力を引き出します。子どもの描く絵が大好きだというヒロモト氏。自分の想いをストレートに受け取ってくれる講師に、子どもたちも自然と心を開きます。「想像力が豊かで、いい子たちが集まっていた」と柔らかな表情で語ってくださり、ヒロモト氏にとっても、子どもたちとのコミュニケーションが、かけがえのないものであることが伝わってきました。講座を終えた後「とにかく、これからも続けていって欲しい。子どもの絵の力を信じている」と、子どもたちへの期待に満ちた言葉を残してくださいました。参加者のなかに、いつか私たちのもとへ物語を届けてくれる子がいるかもしれません。



プロマンガ家の作画道具



対話重視。一人ひとり向き合っただアドバイス

ヒロモト森一 オフィシャルウェブサイト
<http://www.manga-force.com/>

今日からはじめる初心者将棋教室

〈異世代交流事業・全5回〉 2024.8.10〔土〕@九段生涯学習館



異世代間での真剣勝負



講師の大野八一雄先生(右)とアシスタントの田中沙紀先生(左)

▲「ぞうさんだから動けないよ」という可愛い声が聞こえて、思わず「ぞう?」と担当スタッフに尋ねたところ、どうやら駒の“銀”のことらしい。ななめと前に動く様子をぞうの脚と鼻になぞらえているとのこと。参加者は、まさに異世代といえる大人と小学生がおよそ半々で、世代の垣根なく楽しそうな声が響く対局風景が広がっていた。▲講師の大野八一雄先生にお話を伺ったところ、長く指導をしているが、今回のように親子参加や女性の参加者が多いのは稀なケースだという。また、全5回開催という長丁場なもの珍しいとのこと。今回見学にお邪魔したのは、全5回のうちの3回目。参加者は、駒の動かし方のルールをほぼマスターでき、将棋の面白さが分かってきて、「今日は、大駒(働きの強い駒)を使うようになってきました」と大野先生の評。親子で参加しても、対局は別卓となる決まりだ。「ママ同士のペアも初心者とは思えない真剣勝負でしたね」とアシスタントの田中沙紀先生。中には大野先生の教本を持参し、学ぶ手順について熱心に質問される方もいらして驚いた。▲コロナ禍においても、万全の対策を施して開催された千代田区将棋大会も、今年で第58回を迎える。大野先生は毎年審査員を務めてくださっている。次の一手に集中して、とにかく考えることの大切さを改めて感じた。

『ちよっと探訪』では、知る人ぞ知るちよだの魅力に迫ります。第11回は、100年の歴史を刻むレモン画翠を紹介します。



▲ごちゃごちゃ感が楽しい1F売り場。鉛筆の種類も豊富だ

●かつて「日本のカルチュ・ラタン」と呼ばれたお茶の水の地に、レトロな雰囲気を残す店構えのレモン画翠はある。1923年に洋画材料商として創業し、1950年二代目が喫茶店「レモン」を開業。お客さまの目の前で果物を絞るフレッシュジュースが話題となる。また、画材店と喫茶店のような異業種が同じ空間で店舗を構えるスタイルは、今でこそよく見られるが、当時は非常に珍しかったという。これが現在のレモン画翠の前身であり、「レモン」は学生街の新鮮なイメージから名付けられた。●「すべてをよりスマートに、簡単にというベクトルの中で、レモン画翠はあえてその逆を大切にしていきたいと思っています。手を使って生み出すからこそ生まれる“何か”がそこにあります。」かねてより素敵なコンセプトだと思っていたが、今回取材で、松永直美社長にお会いして、字面だけでなく本物だと実感した。●建築模型材料を取りそろえる店として屈指のレモン画翠。全国の有名な設計事務所からも注文が絶えず、建築学1年目の学生が最初に道具や材料をそろえるのに訪れる。額装・保存額装部門でも、名だたる美術館の作品をはじめ、手塚プロダクションやスタジオジブリ作品を手掛けている。●メインの2F・3Fのフロアは、まさに宝探しのよう。取材に伺った日も、さまざまなサイズの木材を手に取りながら熱心を選ぶお客さまの姿があり、専門知識に精通したスタッフが丁寧に接客されていた。1Fには、文具好きにはたまらないおしゃれな雑貨もずらりと並び、海外作家のマスキングテープなどに思わず手が伸びる。●近隣の大学・専門学校との連携も盛んで、今年で第47回となる学生設計優秀作品展を主催している。通称「レモン展」という憧れの作品展に、全国から選ばれた作品が集まる。単なる画材店ではなく、アートそして学生を見守り、支え続ける暖かいまなざしのレモン画翠だ。



▲人気のオリジナル商品。精巧に作られていて見とれてしまう



▲さまざまなサイズの木材がそろう



▲レモン展のパンフを手にする松永直美社長。圧倒的なポジティブパワーをいただいた

INFO

レモン画翠 〒101-0062 千代田区神田駿河台2-6-12 ☎03-3295-4681 <https://lemongasui.co.jp/>

〈編集後記/津山〉かつて使っていたモノや、映画で見かけたモノに触れることで、自分の記憶のトビラが開かれる。そして拡散することで、知らない誰かがそれぞれの記憶にアクセスするトビラをつくる。今回特集した絶滅メディア博物館は、そんな仕掛けが散りばめられた場所です。実際、取材中には初めて手にした携帯電話や実家にある8mmカメラに触れる場面があり、次々と関連する光景が浮かんでくる時間でした。博物館とは新たなことを学ぶ場所だと思われがちですが、過去の自分と出会う学びのスタイルでもあったと感じた取材でした。

DanDan 読者アンケート

皆さまのご意見・ご感想をぜひお聞かせください。アンケートフォームよりご回答いただき、九段生涯学習館1階受付でメール画面をご提示いただいた方には当館オリジナルグッズをプレゼントいたします。

※先着順/なくなり次第配布終了となります

